

スペインの移民に対する言語教育

江 澤 照 美

1. 序

スペインはかつて多数の国民が出稼ぎ労働者として外国に出て行く国であったが、1990年代以降その流れは変化し、逆に外国から多数の移民を受け入れるようになり現在に至っている。特に最近の10年間に国内在住の移民の数は急増したが、2000年公布の新外国人法により、不法滞在者となっていた移民の合法化が促進された。この合法化がさらに彼らの国からスペインに多くの移民を呼びよせることになり、移民たちは自らの風習や習慣を持ち込み、それはスペインやその国民に新しい価値観をもたらすと同時にスペイン人と移民との間に数々の摩擦をも発生させてきた。移民たちは様々な言語圏からスペインに来ていて、彼らの社会的立場の弱さ故に出身国・出身地域が同一もしくは近隣の人々で構成されるコミュニティを彼らの居住地に形成し、そこでは一時的な出稼ぎ労働者ばかりでなく、今後長期にわたり定住を予想させるほど地域に根付いているように思われる者たちも見受けられる。

ヨーロッパの他国との往来が昔から容易であったがゆえに、スペインでは移民の存在それ自体は特に珍しいものではなく、近年流入してきた移民がスペインやその国民に多大な影響を与えたとすればそれは短期間での移民人口の急増によるものであろう。しかし、同時に近年の移民たちの出自の多様性も見過ごすことはできない。多言語国家であり、文化的にも多様性を持つスペインに、他の言語圏から、あるいは同じスペイン語圏ではあるがスペインとは異なる文化習慣を持つ国々から多数の移民が流入し、その数は今なお増加の一途を辿っている。そんな移民たちがスペイン社会のみならず言語面においても何らかの変化をもたらすことに寄与し、また彼ら自身も生活の必要上スペインのスペイン語と向き合う必要に迫られているという現状を探究するのが本稿の主たる目的である。すなわち、スペインの移民問題を言語的側面、特にスペイン語と移民との関係という観点から考察する。

まず初めにスペインの移民の現況を示し、次に移民がスペイン語にもたらした言語上の影響を概観する。さらに、移民の急増に伴って彼らを対象としたスペイン語教育制度の確立が政府にとって急務となったが、移民向け言語教育の実情やスペインの教育界が整えはじめた言語上の支援態勢とその内容を吟味し、日本の語学教育との比較対照が可能な部分についても検証したい。

考察の主要な対象となるのはスペイン語を母語としない移民の子弟や成人移民であるが、中南米のスペイン語圏出身の移民を取り巻く言語事情や教育上の問題も視野に入れて、幅広く移民全体の言語教育問題を取り扱う。

2. スペインに居住する移民の現状

2.1. 移民問題

現在、スペインで移民問題と総称される諸々の事柄は主に経済的な問題を内包しているが、それに加えて、人種や言語の違いゆえにスペイン人と移民たちの間に発生する文化的摩擦から明るみに出る人種差別や外国人嫌いの感情が絡み、その解決は容易なことではない。

本章では、移民についてのアンケート調査の分析を通じて、スペイン人の深層心理に潜む外国人嫌いの感情の正体や実態を鋭く指摘している Cea D'Ancona (2004) からいくつかのデータや図表を参考にして移民問題の現状に迫ることとする。

現在スペインに住む移民の国籍は以前にも増して多様化し、中南米、アフリカ、アジアさらにはヨーロッパからの流入組も数多いが、同じスペイン語圏である中南米の中ではエクアドルからの移民数の圧倒的な多さが注目に値する。碇 (2004: 140) によると、スペイン政府は2001年1月にエクアドルと二国間協定を締結させ、同国人の正規移民の数は、対2000年比で174.3%増加し、中南米出身の居住者全体の約30%を占めるに至っている。Cea D'Ancona (2004: 311) のうち、移民の居住者が多い上位10の自治州における移民を国籍別に見ると、移民数の多さではモロッコからの移民のほうがエクアドルからの移民を上回るが、住民登録済みの移民数となるとモロッコとエクアドルのデータは大差がない¹⁾。スペイン語話者であるエクアドル人の移民は、安価な労働力を多く必要とするスペインにとって意思疎通の問題も心配する必要なしに雇える貴重な人材であり、従っ

て彼らの受け入れ体制も整備されているようである。

しかし、移民をその使用言語から分類してみると、中南米系移民のようにスペインとは用法が多少異なるスペイン語を話す人々に加えて、他のヨーロッパ諸国のロマンス語系話者の移民や、スペイン語とは全く別系統の言語の話者もいる。近年、言語学的にスペイン語とは親戚関係が希薄で、かつアルファベットを使用しない言語の話者が移民として増えてきて、後述するようにこのような移民に対する言語教育のあり方が国内のスペイン語教育界において緊急の検討課題となり、現在に至っている。

ところで、どの国でも起こっているように、スペインにおいても、大勢の移民受け入れ・合法化に国民全員の積極的な賛同が必ずしも得られているわけではない。Cea D'Ancona (2004: 348) は、スペイン人が見せる移民に対する許容の度合いについて、性別・年齢・学歴・支持政党・職業等ごとに観察される一般的傾向の図表化を試みている。全体的に保守層は移民をあまり容認したがらず、革新層は寛容であるという傾向が見られるが、態度保留の人々には右派が多かったり、移民受け入れには否定的だが交流は拒否するほどでもない人々もいるという結果も出ている²⁾。存在を容認するか否かに関係なく日常生活で移民と身近に接する機会をしばしば持つ地域に住む人々も少なくないので、国民の移民に対する見方は徐々に変化しつつあると言える。

実際、Cea D'Ancona (2004) が示す数々のデータのうち、現在のスペインに存在する主要な問題は何であると思うかを問うアンケート調査が示す結果は興味深い事実を示している³⁾。回答者が出した結果によると、国にとって主な問題と思われる諸問題の中で、移民問題は2001年2月には、失業、ETAによるテロ問題に次いで第3位を占めていたが、2003年5月には第5位に落ちている⁴⁾さらに、回答者個人に影響を及ぼしている問題は何かという問いへの回答でも、2001年2月には第4位、2002年6月には第5位にランク入りしていた移民問題が、2003年5月には5位以下のランク外に落ちている。つまり、国内の社会問題としての移民問題の順位が次第に下がっているのである。もちろん、移民問題はまだ完全に解決したわけではなく、移民人口のさらなる増加を好ましく思わない人々も相変わらず存在するが、近年スペイン人の中で移民に対する理解が少しずつではあるが深まっていることがここでもわかる。

スペインで移民が受け入れられつつあることを示すもう一つの指標とし

て養子制度がある。最近の EL PAIS 紙の報道によると、養子として迎える子供がスペイン人である比率が近年低下傾向にあり、現在スペイン人の養子は5人に1人の割合になっている。同紙の示すデータによると、1997年にはスペイン人の養子の割合が全体の47.4%であったのがその翌年からその割合が落ちて2003年には18.4%となり、残りはスペイン人以外の子供が養子として引き取られている⁵⁾。スペインでは合法化される移民の数が徐々に増加しているが、同時にこのような養子制度により増えていく移民の子供もいる。このようにして増えた移民は将来、現在の成人の移民よりよい仕事を得るために高い学歴を目指す者も増えてくるだろう。また子供の場合はスペイン人と同じ教室で学校教育を受けることになる。学校という世界にも今まで以上に様々な文化背景を持った移民たちが入ってくることになり、スペインの教育現場は、移民が急に増えだした1990年代末から言語上生じてきた問題や多文化理解に対する授業を充実させる必要性を認め、このために講ずる様々な方策は今後より一層その重要性を増すことになるのである。

2.2. 移民をめぐる言語表現

スペイン語を母語としない移民たちは生活上の必要に迫られスペインのスペイン語を理解しようとしている。同国人・同郷人のいるコミュニティ内では自分の母語を使えても、仕事をする間、あるいは学校に通う上で、スペイン語が理解できないと日常のあらゆる面で支障が出てくるからである。

中南米系の移民はその点、スペイン語話者であるので、非スペイン語話者である他の言語圏出身の移民に比べて言語上の問題は少ないように思われるが、実際にはスペインと自分の出身国で使用される語彙や表現の違いが存在するため、その違いを正確に把握しないと時折コミュニケーション上の不都合が生じてしまう。江澤(2005)にて言及したコロンビアの El Tiempo 紙 web サイトのコンテンツ “Colombianos en España” はその後出版された Montoya(2005)の suplemento として再収録された。Montoya(2005)それ自体もコロンビアで日常的に使われている口語の語彙や表現、隠語等を知るのに役立つが、suplemento においては特にコロンビアで使用されているがスペイン(特にマドリード)では使われない表現や習慣の相違点について読者に喚起している。その用例の一部を紹介する。

“Almuerzo” Comida del medio día, pero sólo en Andalucía. En el resto de España almuerzo significa “la mediamañana”, como se dice en Antioquia o “las medias nueves”, como se dice en Bogotá. (以下略)⁶⁾

“A la orden” Esta expresión no se usa en España y les suena risible. Por teléfono, al contestar, se utiliza *dígame, diga o sí.*⁷⁾

この *suplemento* はスペイン在住のコロンビア人移民向けに作られたものであるが、以上の用例の定義文を見ると、スペインのスペイン語とコロンビアのスペイン語の語彙や言語習慣の違いを知ることができる。

2.1. において、スペイン人が移民を受け入れつつある現状に触れたが、不法就労のため立場の弱い移民が社会の底辺で不当な扱いを受けている現実は今なお存在する。筆者が今年の夏、スペイン滞在中に封切られた Fernando León de Aranoa 監督の最新作 “Princesas” では、共に売春をしているスペイン人の主人公とドミニカ共和国出身の移民の女性との交流が描かれているが、スペイン人の移民たちに対する感情や扱い、移民たちの日常生活ぶりが伺えた。移民に対して否定的な感情を持つ人々の存在については2.1. でも触れたが、同時に移民たちの境遇を理解し、彼らの問題を一緒に解決しようとする人々も同時に増えてきているのがスペインの現状である。

移民に対する一般の人々の態度は彼らに対する言語表現にもあらわれてくる。近年、マイノリティである人々をあらわす語彙の適切さをチェックし、不適切と判断したらその使用を回避して他の言葉に置き換えようとする動きが、英語圏特にアメリカ合衆国を中心に広まりつつある。スペインでも「政治的に正しい」ことばとしてこのような言い換えがマスコミの話題にのぼることがあり、移民に関わる語彙の言い換えについては、Calero *et al.* (2002) が DRAE の1992年版と2001年版を比較して、RAE が人種差別的なニュアンスを含んだ定義を持つ語彙を辞書でどう扱ってきたかを調べている。スペイン語も他の言語と同様に特定の人々を傷つけかねない表現を持ち、また人を罵倒することばが多い言語であると言われることがある。まず、スペインでは古くからジプシーに対する社会的差別が存在していた。さらに、イスラム教徒やユダヤ教徒をイベリア半島から追放した歴史を持つカトリック教徒の国でもあるので、現在移民として居住している人々のうち、彼らやアジアの異教徒を揶揄する表現もある。

Calero *et al.* (2002) は1992年版の DRAE において民族（ここでは negro,

chino, moro, judío o gitano 等) の総称をあらわす語の定義の中に、悪い意味を持ち、ひいてはその民族全体のイメージに影響しかねないものがあることを指摘し、DRAE が2001年に新版を出した時にもまだ削除されず残っているものがあることを問題視している。例えば、“gitano, na” に対して “*fig y fam* Que estafa u obra con engaño Ú. t. c. s.”、そして “gitanear” に対して *intr. fig.* 2. Tratar de engañar en las compras y ventas. という定義があったり、“judiada” が「汚い(不正な)行為」を意味していたり、“hacer (el) indio” で「こっけい(ばか・無責任)なことをする」という軽蔑語がある。東洋人に関しては、“engañar a uno como (a) un chino” 「～をころりとだます」という表現が存在する。以上のような表現はずっと以前からあったのだが、近年イスラム圏や東洋からの移民が国内に急増することで生じた社会問題により注目を浴び、その使用が一部の言語の専門家などによって問題視されるようになったのである。

ところで、ここで指摘した特定の民族を揶揄する語義は西和辞典にも掲載されているので、DRAE 同様これを放置している西和辞典も問題があると言われる日が来るかもしれない。移民も社会のマイノリティであるので彼らの呼称についても「政治的に正しい」表現を使用すべきとされているが、それは例えば “raza negra”, “negros” を “gente de color” という表現に変えたり、Lechuga Quijada (1996: 66) が書いているように、アフリカ人・アジア人・中南米人に対して “gente del sol” を使うことなどを意味する。しかし、他のことばに置き換えたからといってその民族への差別的感情が消えるわけではない。また、代替語が一般に定着するかどうかは現在のところ不明であるし、言い換えの表現を多くの国民が認めるとは限らない。よって筆者は DRAE や西和辞典の「政治的に正しくない」語義を即刻削除すべきという考え方にはやや懐疑的であるが、このようなことが問題になるのは近年の全般的な傾向であるのも事実である。

“Los inmigrantes” という表現それ自体の使われ方にも疑問が呈されている。これは Calero *et al.* (2002) にも言及されていたことであるが、Ribas Bisbal (2003) は彼らをスペイン人、特にマスコミ等がいかなる文脈の中でいかに形容してきたか、そのステレオタイプ的な命名の仕方を取り上げ、問題点を明確に指摘している。移民についての報道の中で、“los inmigrantes” はステレオタイプの中に押し込められてひとくくりにされたり、nosotros の側ではなく los otros の側に追いやられて表現されがちであ

るとのことである。そんなスペイン人の心理をあらわす一例が“el mundo de la inmigración”という表現で“la inmigración”というのは我々の世界とは異なる別の世界・社会集団であるという発想が顔をのぞかせる。Ribas Bisbal (2003) が取り上げるステレオタイプ化やこのような表現が人種差別に結びつく可能性があることは確かに否定できないであろう。しかし、他方で「移民問題」という表現があてはまるような事柄がスペインにおいて未だ完全に解決されているわけではなく、移民を排除しないにしても、移民が移民と呼ばれなくなるような時代がスペインにまだ到来していない現在、この種の表現の使用の是非を巡る議論は当面決着を見ないようにも思われる。Ribas Bisbal (2003) もこの点については明確な結論を出せないままであることを認めている。

しかし、少なくとも Calero *et al.* (2002) や Ribas Bisbal (2003) は、規範的な辞書から差別的表現を追放することに読者を賛同させたり、どんな表現が移民排除の発想に結びつくのかを自覚させる役目は果たしうるであろう。

2.3. 移民を取り巻く多言語環境

移民と総称される人々の出身国や使用言語は様々であるが、同時にスペインも多言語国家であるため、移民が暮らす地域の言語環境もより多様に富む場合がある。Díaz (2002) はビルバオの一地区に住むアフリカ系移民を取り巻く多言語状況の報告であるが、ここで取り上げられる被験者の人々の出身地が複数の言語を使用する国であることに加え、社会的立場の弱い移民であるがゆえに同じ立場の移民仲間との交流も盛んにおこなっていて、かつ生活や仕事のためにスペイン人とも接している。さらに、ビルバオはカスティーリャ語(=スペイン語)とバスク語の二言語併用地方の都市であるため、そこに住む彼らアフリカ系の移民は現地在住のスペイン人以上に複数の言語が聞こえてくる場に身を置き、また彼ら自身も必然的に生活の様々な状況に応じて複数の言語を使い分けることになる。

例えば、あるセネガル人の場合、アフリカ系移民仲間との会話では自分の母語やフランス語、アラビア語を相手に応じて使い分け、イスラム教徒として礼拝する時はアラビア語、日常生活や仕事の場で遭遇する人々とはカスティーリャ語で話す。またバスク語も単語程度は使っている⁸⁾。

しかし、Díaz (2002) で紹介されている数々の移民の例は成人の労働従

事者の言語生活であり、学校で語学教育を受ける機会に恵まれないため、彼らのスペイン語能力は専ら聞き取りや会話でどうにか使えるという程度で、相手とコミュニケーションを図ることは可能であるが、文法力や作文能力には疑問符がつく。Díaz (2002) で引用されているガンビア人の商売人 Ali の談話を観察すると、全体として意図するところは何とか通じる文章を生成しているものの、動詞の活用の誤用や語彙選択の誤りや不完全な発音などが会話中に頻出する⁹⁾。

彼らの誤用の程度から判断すると、正式に学校教育を受けない限り彼らの語学力は矯正が困難であると思われるが、このように、中途半端な語学力しか持たない成人移民の教育には数々の困難がつきまとうことが予想される。この問題は第4章で再び取り上げる。

3. スペインにおける移民向け言語教育の取り組み

3.1. スペインの教育制度

1990年にスペインは LOGSE (= La Ley de Ordenación General del Sistema Educativo) と呼ばれる法律を公布し、1991年より教育制度の大幅な改革を実施した。その改革の中心となったのは義務教育期間の延長、0歳時からの幼児教育、教育権限の自治州への移譲などであった。

それが2002年12月になり新たな教育制度改革法が制定された。LOCE (= La Ley Orgánica de Calidad en la Enseñanza) と呼ばれるものである。これは ESO の再組織を中心とした教育制度の改革であり、留年制とコース制が導入され、基礎教育や外国語教育が一層重視されるようになった¹⁰⁾。

LOCE による改革は2003年から本格的に始められる予定であったが、法を制定した PP が2004年3月のテロ事件への対応の失敗により政権を失った。これにより LOCE の理念はどこまで継承されるのか先行き不透明となったが、PSOE に政権が移っても移民向け教育システムの確立が国としての急務である事情は PP 政権時代と同様であり、スペインの教育制度は試行錯誤しながらもさらなる改善への道を模索している。

LOCE の条文の内容は web ページでも閲覧可能である¹¹⁾。その第7章は特殊教育の必要を有する子弟への配慮に関する法であり、その中で外国人の子弟について第42条にて彼らへの特別な配慮をする必要性が明文化されている。特に義務教育を受ける年齢の子供、もしくは15歳以上で ESO

の勉強についていけない子供に対する言語や文化などの特別な学習支援を謳っている。その特別な学習は、スペイン人と共に授業を受けると同時に別に実施することになっている。また、生徒の父兄が必要な助言を受けられるような措置をとることも盛り込まれている。

このように LOCE の第42条は移民の子弟に対して補習授業をすることで彼らに勉学上のハンディを克服させようとしているようである。本稿ではスペイン語つまりカスティーリャ語圏での教育全般と移民向けの言語教育を中心に上げ、スペインの地方語圏における同様の問題は参考事例としてのみ言及する。しかし、地方語圏に住む移民にとっては地方語習得は新たな課題となりうるものであり、しかもスペインに住む大半の移民にとってなじみが薄い言語であるため、地方語圏の移民とその言語教育問題はさらに複雑な様相を見せると予想される。

3.2. 教育関係機関や専門家による取り組み

スペインの教育関係機関や語学教育の専門家たちは移民向け言語教育に対してどのような態勢で臨んでいるのであろうか。主要な例を挙げて、スペインにおける諸機関もしくは専門家たちの近年の取り組みのあり方を見ていくことにする。

3.2.1. 教育科学省

教育科学省は現在のサパテロ政権下に置かれた教育関係省庁である。その web ページには移民の現況や移民向け教育に関するデータや計画などが散見され、あるデータによると、1997～98年ぐらいから学校に通う移民の数が右肩上がりに増えているのが観察できる¹²⁾。

LOCE を踏まえて教育科学省は特にスペイン語の知識が不足している移民の子弟向けの教育計画を推進中である。一例を示すと、セウタやメリージャのような地域では、スペイン語の知識が十分とは言えないイスラム教圏からの移民の居住者が多い。スペイン全土でも移民の居住分布は多少なりとも片寄りがあり、移民の多い地域、またスペイン人とは言語も文化も大きくかけ離れた移民に対する教育上のサポートを教育科学省が意図していることがわかる。

また、教育科学省の web ページには多文化教育に関連した情報が数多く掲載されている。CIDE (= Centro de Investigación y Documentación

Educativa 教育調査情報局) の調査データも興味深い。2005年1月の第13号によると、現在の移民の子弟のうち4分の3以上は公立の学校に通っていること、マスコミ等も報じているように、南米人に次いでアフリカ人の子弟が多いこと、現在は初等教育を受けている子供が多いがそれはいずれESOに進む移民の増加につながること等の予想や展望が述べられている¹³⁾。実のところ、特筆に値するようなデータはそれほど多くなく、筆者がネットや現地の新聞等で知り得た事実と大差ない内容とも思えたが、スペインにとって今や移民の子弟教育が相当な重要性を持ち、その進展に政府も対応策を考えていることがこのweb ページの内容からも見て取れる。

3.2.2. Instituto Cervantes

Instituto Cervantes は Real Academia Española と共に、外国におけるスペイン語とスペイン語圏の文化の普及のために尽力していることで知られる最も著名な言語関係機関であるが、近年はスペイン国内で増加する一方の移民に対するスペイン語教育に関連した活動にもその力を注ぎつつある。そのことを顕著に示すのが web ページ Centro Virtual Cervantes 内のコンテンツとして置かれている “La enseñanza de segundas lenguas a inmigrantes” である¹⁴⁾。移民教育に関するディベートのコーナーがあったり、この問題に関連した先行研究や出版物、web サイトなどのガイド紹介、ニュース掲示板の設置などにより、現在移民教育に携わっている現役の教師やこのテーマに興味を持つ者にとって有益な情報収集や交換ができる場を提供している。

ディベートのコーナーは2001年4月から始まり、“Inmigración y enfoque intercultural en la enseñanza de segundas lenguas en Europa” というタイトルのもと、幾つかのサブテーマに分かれて意見交換がおこなわれている。また、2003年6月21日にマドリードで開催された集会 «La enseñanza de segundas lenguas a inmigrantes» のプログラムや発表概要も閲覧可能である。

ディベートや移民教育関係の集会で扱われるテーマを観察すると、移民向けの教育に対するアプローチはほぼ共通点があることに気づく。ディベートでは現在9つのテーマ(多文化教育、第二言語習得プロセス、コースデザイン、教授法、教材、年少者向け教育、成人向け教育、文字教育、教員養成)が設けられている。このように、移民向け教育では学習者の年齢と母語、アプローチ、文化の比較など多角的な方面からの考察が要求され

ている。集会「La enseñanza de segundas lenguas a inmigrantes」においても上記の観点から様々な問題が提起されている。このようなスペインの教育界の取り組みについては、次章でさらに詳しく検証をおこなう。

3.2.3. CARABELA

CARABELA は外国語としてのスペイン語教育に関して現在年2回発行されている季刊の専門誌である。語学教育の専門家による論文や書評が掲載され、先述した Centro Virtual Cervantes 同様、スペイン語教育に関する最新の動向を知るのに役立つ。特に注目すべきは2003年発行の第53号と第54号で、前者は“La enseñanza del español como segunda lengua / lengua extranjera a inmigrantes”が、後者は“La interculturalidad en la enseñanza de español como segunda lengua / lengua extranjera”が各々特集タイトルに冠せられた論文集である。

移民への教育や多文化教育に関する論文はそれ以前の号にも見い出すことができるが、近年のこの2冊で特集として取り上げられるほど移民への教育問題は2000年以降スペインで軽視できない問題になってきたことがわかる。移民教育特集号では3.2.2. の Centro Virtual Cervantes で個別にテーマ化された移民の年齢その他の事項が各論文の主題として取り上げられているが、その詳細について述べるのは次章に譲ることとする。

また、多文化教育特集号では、スペイン以外の国の先行研究の紹介から、実際に外見や母語の異なる移民の子弟と机を並べることになったスペイン人の子供の反応まで、理論と実践の両面から多文化教育の望ましいあり方が模索されている。2.2. で言及した Ribas Bisbal (2003) はこの号に所収の論文である。

その他の号は、特に移民対象に限定しない L2 スペイン語教育についての論文や書評が多数を占めているが、移民に対する語学教育にとっても参考になる情報が多く、移民教育に携わる教師にとって必読の文献である。

4. 対象者別の方策

前章において、スペインにやって来た移民に対して政府やスペイン語教育に関係する機関、団体がどのように取り組んでいるかを述べた。本章では、移民向け言語教育関係者たちが考慮している諸要素及び想定されうる

問題点を取りあげる。3.2.2. や3.2.3. で言及したように、移民向け語学教育の改善に向けて現在取り組んでいる現場の教師たちは、効率よく教育をおこなうために彼らの年齢・母語を考慮して教授法や教材を決定し、また言語教育だけに限らず多文化教育もおこなう、というふうに多面的にこの問題を捉えてよりよい方法を模索している。従って、本稿においても、まず年齢別に移民に対する言語教育のあり方を考察していくが、同時に彼らの母語や多文化性の問題も論じることになる。

4.1. 年少者向け言語教育

未成年を対象とした教育については、8歳から11歳までの初等教育を受ける子供向けの教育と ESO の第1課程と第2課程、すなわち12歳から16歳の子供向けの教育において各々理想的な方法が模索されている。

3.1. で見たように、LOCE では15歳以上で勉強についていけない移民の子弟への特別な教育上のバックアップをおこなうよう定められている。基本的には ESO の段階で移民の子弟が授業を受けるのに支障ないぐらいの語学力をつけることが求められている。

スペインは元来外国語としてのスペイン語教育については研究・実践共に進んでいて教材も比較的豊富であるが、近年の移民学習者の急増のため、特に移民対象を前面に打ち出した L2教材の出版が増えつつある。ここでは筆者が最近スペインの大型書店で入手した2冊のテキストの内容を紹介しながら、この種のテキストの存在意義を問うことにする。

まず、Viana y Orte (2004) は年少の移民子弟向け L2スペイン語テキストである。従来の子供向け L1もしくは L2スペイン語テキストと異なるのは登場人物に移民の子供がたくさん登場することである。彼らの名前や国籍、肌の色の違いが挿絵で明示され、スペイン人の子供と一緒に教室で学び、遊び、先生や友人との触れ合いでいろいろな事柄を学んでいくという設定になっている。問題が出され、生徒が空欄を埋める形式になっているのは従来のテキストと同様であるが、生徒たちの出身国の文化とスペインの文化の比較対象をさせたり、スペイン語で習った単語を生徒たちの母国語ではどう表現するか書かせる欄も設けてある点が注意を引く。このテキストの狙いはテキストの冒頭に示されている通り、生徒のコミュニケーション能力の獲得と促進が最も重要な目標であるようだ¹⁵⁾。中身は一見して移民の子供向けテキストであることが明白であり、そのスタンスは非常に

わかりやすい。しかし、生徒の母語で書かせたものをチェックするのは誰なのだろうか。生徒に母語でも書かせるならばその答えの適切さや綴りの正しさなども教師側でチェックするシステムも整えられてしかるべきである。しかし、通常、教師が生徒の母語についての知識を持っているとは限らず、むしろ知らない可能性のほうが高いであろうことを考えると、答えは書くだけに終わり、せつかくの移民向け配慮も意味のないものになりかねない。このテキストを使用することで生徒にスペインの文化について学ばせる一方で、自国の文化に対する興味も持たせるといふ、多文化教育をも狙った意図は十分理解できるが、詰め甘さが感じられる。

次に挙げるのは、Villalba Martínez y Hernández García (2003) であるが、マドリード州教育省が発行した、ESO の第 1 課程と第 2 課程を教える教師向けの指導書で、対象となる生徒はアルファベットを使用しない言語の話者である移民の子弟である。同書の前半は授業計画やアクティビティ、評価についての指針を示している。スペイン語が不十分なだけでなく、自分の母語でさえ満足に読み書きできない生徒がいることをふまえ、また、成人対象の語学教育は一般的に子供に対する語学教育に比べると、顕著な成果が得られにくくなる傾向があるため、移民には ESO の間に年齢相応の教育をほどこすのが望ましいという教育省の方針がうかがえる。

後半部は教師や生徒向けの教材モデルの提示であり、挨拶から始まり、学校や家庭、街角で出会う人や事柄を通して必要な表現や語彙を教えるためのヒントを提供している。具体的な文例やマドリードや生活の各場面の写真・イラストなども用意されている。全般的な内容としては学校で教えるべき文法事項も含まれている一方で、学習者にマドリードの生活に慣れさせるための情報も随所に散りばめられている。

同書が述べる、アルファベットを使用しない言語圏出身で ESO の課程に属する移民の子弟に教えるべき内容をざっと見渡すと、同年齢のスペイン語母語話者用のテキストで要求されているレベルに比べてはるかに易しく、ほぼ初等教育並みであることがわかる。一般に子供は語学に関して大人より適応能力が高いと言われているが、それでもスペイン語の授業では補習の必要があるレベルにしか到達していない移民の子供も少なくないのであろう。この指導書でも言語習得と同時に文化の多様性について生徒に注意を促すような工夫を授業の中でほどこすことが教師に求められている。

以上、移民向けとされるテキストや指導書の内容を調べてみると、目標とされる学力レベルや現実におこなわれている教育のスタンスが垣間見えてくるが、このようなテキストを見て気づく問題点は、もっぱらアルファベットを使用しない言語圏出身者に対する語学教育に関するものであり、中南米出身のスペイン語話者である移民の子弟にはあまり影響はなさそうに思える。スペイン語教育だけに関して言えば、彼らはスペイン人の同年代の子供と同じレベルの勉強をこなせるはずと考えられるからである。

しかし、実際には中南米出身者に対する語学教育にはまた別の問題が存在するようである。そのことに気づくのは実際に教鞭をとる現職の教師たちであり、なまじスペイン人と同じ言語を使えるがゆえに彼らの問題が軽視されがちであることに危機感を抱いている。Andrade y Cabezalí (2004) はエクアドル出身の移民の子弟対象の、主に LOGSE 時代における中等教育の問題点を指摘している。言語教育上の支援は主としてスペイン語話者ではない移民の子弟に向けられがちであったようだ。また、中南米のスペイン語の中でスペインのスペイン語とは異なるところが相当あり、そこから生じる伝達上の誤解から移民の子弟が実際以上に勉学についていけず遅れているように見なされることも少なくない。また、移民たちが置かれている現状や彼らの出身国の文化について学校やスペイン人教師がよく知らないままであるにも関わらず、中南米系移民の子弟に対する教育に対して多文化教育という言葉が安直に多用される風潮や政府の方針についても批判的な目を向けている。現在の LOCE が果たして Andrade y Cabezalí (2004) の批判に答えられる教育制度であるのか、その答えを出すのは時期尚早であろうが、移民自身の状況が未だ流動的である現在、多文化教育はさらに厳しくその中身や意義を問われることになるであろう。

4.2. 成人向け言語教育

義務教育を受ける必要のある未成年の移民で、学習に遅れが見られる場合、言語教育を含めた十分な補習を受けさせることが法により保障されているが、成人については状況が異なる。成人の場合は何らかの職業に就く必要があるため、本人の事情や意志、必要性に応じて言語教育との関わり方が決まってくる。十分な意欲を持って勉学に励む場合でも、特に外国語を新たに勉強するにあたって、子供よりも成人のほうが上級に到達するペースが落ちるのが一般的であり、それに加えて定期的に勉学に励む状況に

置かれていないと、成人に対する言語教育は目立った効果を期待できなくなる恐れがある。

成人向け言語教育において問題になるのは主としてスペイン語を母語としない移民であり、中南米出身の成人移民の場合は義務教育を終えている（とみなされる）ため、4.1. で指摘した多文化教育の過程で起こりうる問題に関わる者とは通常考えられていない。ただし、国内の二言語併用地域に住む移民の場合、当地の地方語を習得しているほうがより条件のよい職に就けるため、外国語としてその地方語を学校で勉強することを考える人々もいる¹⁶⁾。

スペイン語が母語ではない成人の移民が日常生活の中でことばを覚え、言語教育による矯正を受けないまましていると、2.3. で紹介したような多言語環境で生活する移民の例に見られるように、自分の意志はどうか伝えられるが、いつまでたっても文法的にきわめて不完全なままの言語しか駆使できないことになってしまう。García Parejo (2000) はマドリード在住の成人学習者を対象とした調査結果の誤用分析をおこなっているが、アルファベットを使用しない言語圏出身のスペイン語学習者同士がお互いコミュニケーションを取り合うために使用する不完全な言語を「スペイン語におけるピジン化」と呼ぶ。ピジンは本来外部から来た者と現地の人間の意思疎通の必要上生み出される新しい言語であるが、広義には同等の知識を持たない者同士のやりとりも含みうるため、非スペイン語母語話者である移民が生成する誤用の多い文はまさしくピジン化されたスペイン語であることになる。実際、García Parejo (2000) の4名の被験者が生成したスペイン語の文に見られる傾向として、短文化、動詞の大半は直説法現在と点過去を使用すること、*cópula* や冠詞脱落などの単純化等が指摘できる。性数変化や語彙選択にも誤用が見られるが意外にも上記の誤用ほどには顕著に出てこないのも興味深い。

生徒が語学教育を受ける場がその言語の使用地域である場合、生徒の国籍・出身地は同一であるより多様性に富んでいることが多いと思われ、現場の教師は必ずしも生徒の母語について詳しいわけではないが、移民への教育経験を重ねるほど特定の言語の話者が陥りやすい誤用に気づく。そのような事例報告の増加は他の教師にきわめて有益な教授上のヒントを与えてくれるし、それはスペインにおけるL2教育の発展に結びつくので非常に望ましい傾向と言える。García Mateos (2003) 同 (2004) はそのような

研究報告の例であり、成人の移民に対する豊富な教育経験を元に、移民の母語別の誤用を数多く紹介している¹⁷⁾。

アルファベットを使用しない言語を母語とする移民の言語能力については別の問題もある。移民とひとくくりに総称されがちな彼らの出身国や地域は様々であるが、García Mateos (2003: 109-110) によると、出身国で学校に通った経験がなくて読み書きができなかったり、少しは通ったが不十分であったり、母語については問題ないが外国語学習経験に乏しかったりと、移民たちの出身地における言語生活も千差万別である。こういう移民たちがスペインで学校に通う機会に恵まれたとしても、学校がおこなうクラス分けが彼らの言語的多様性に完全に対応できるようになっているとは限らない。移民の多くが通う教育機関として Escuela Oficial de Idiomas がある。スペイン各地に設置された公立の語学専門学校であるが、私立に比べ格安の授業料のため人気が高く、それゆえにスペイン語コースはすぐに入学できず待たねばならないほどである。今後もスペイン国外から非スペイン語話者の移民が流入するにつれ、授業料の安い公立の語学学校への入学希望者は一層増えることが予想されるが、需要に供給が追いついていない現状がうかがえる。このように成人移民の場合、たとえ彼らに勉学の意志があったとしても、子供向けの教育に比べると勉学を続けるための環境は十分なものであるとは言い難い。

4.3. 教授法や教材について

4.1. と 4.2. において移民対象の語学教育の問題点や移民自身の現状について、年齢別に考察した。本項では少し視点を変えて、移民対象のクラスで使われる教授法や教材について検証を試みる。

Hernández García y Villalba Martínez (2004) は移民向けテキストとして出版されている L2用スペイン語テキストを比較分析している。移民の急増と同時にスペインでは移民を対象とした語学テキストが次々と出版されるようになったが、その一方で、スペインの一般社会には移民に対するステレオタイプ的なイメージが作りあげられ、しかもそれは彼らの現実のほんの一面を皮相的に表現したものであったり、デフォルメされたものであったりすることを Hernández García y Villalba Martínez (2004) は問題視している。移民は、教養に乏しく、文盲で、子供の場合は進級が遅れがちで、言語に関する知識が欠如している……などというふうに複数のものが

欠如している人たちと決めつけられる傾向があり、移民教育とはそのような何かが必要な人々に必要なもののひとつであるとみなされているという¹⁸⁾。この指摘に見られるように、様々な国からやってきた、言語も文化も異なる移民をひとまとめの集合体として、どちらかと言えば偏見の目で見るとスペイン人の姿勢については、当のスペイン人の中にも見過ごせないことと考へ、事態の改善を図ろうとしている人々がいるのが救いと言えよう。2.1. の Cea D'Ancona (2004) のデータにあらわれたように、現在のスペインでは移民にいまだに偏見を持つ人がいる一方で、その偏見を打ち破ろうとする人が共存しているのである。

Hernández García y Villalba Martínez (2004) の調査によると、いわゆる移民対象のテキストは、教授法別に見ると、コミュニケーションアプローチを採用しているテキストが多く (12冊中9冊)、タスク活動中心のものが2冊、構文中心の説明をおこなっているものが2冊と判断された¹⁹⁾。対象者の年齢別に分類されたデータを見ると、コミュニケーションアプローチが採用されているテキストは成人向け・未成年者向けどちらにも存在する。調査した例が少数であること、またスペインでの生活のために移民向け語学教育用テキストには言語運用能力の養成が第一に求められていることを考えると、テキストの対象者の年齢と採用される教授法の相関関係があまり見い出せないのはさほど不思議なことではない。

Hernández García y Villalba Martínez (2004) はこれらのテキストに対して、内容が充実していることは評価しているものの、現場の教師が使用する際にその内容を包括的に捉えにくいものが多いとも評している。特に教材作りの労苦は伺えるものの、状況を無視した不自然な例文があったり (Yo me llamo Carmen. Yo tengo 9 años. Yo soy de España. Yo soy española. というふうに主格人称代名詞が省略されず連続して登場する)、語彙や機能の説明ほどには文法は十分に説明されなかったりという欠点を持つテキストも散見されるとのことである²⁰⁾。また、練習問題にアクティビティーを織り込んでいるとはいえ、内容に乏しいテキストもあるという²¹⁾。

導入のプロセスが適切でないと見なされるテキストも存在する。当初は教師が最大限コントロールするが段階的にそれを減らしていくのが理想的な授業の進め方であるにも関わらず、各単元にそのような段階的変化が見い出せず、ワンパターンのアクティビティーしか要求しないものがあったり、写真や彩りのないイラストだけで学習意欲をそそらないテキストもあ

ると指摘されている²²⁾。

結局、Hernández García y Villalba Martínez (2004) の調査の結果、現在出版されている移民対象のテキストで彼らが容認できるものは数冊だけであり、ステレオタイプの移民の姿がテキストの内容に投影される傾向があるが、言語テキストである以上、まずその言語を勉強するためのテキストであることが前面に出るほうが望ましいという結論が出されている。すなわち、一見して「移民向け」であることがわかるようなテキストに対しては全体的には辛口の評価が下されている。筆者も4.1.において、移民の子供向けのあるテキストに設けられた回答欄でスペイン語と彼らの言語で語彙を綴らせる練習問題の意義に疑問を感じた。スペインは従来外国人向けのL2教材については他のスペイン語圏諸国のテキストより開発が進んでいるため、移民向けのテキストを作るに際しても従来のL2テキストとは明らかに異なるものにする必要はないと思われる。しかし、従来のL2テキストを移民向けの授業で使用すると、多文化教育の要素をどこに織り込むかを別途考える必要が生じる。移民向け語学教育の場合、多文化教育との兼ね合いについても教師は考慮しなければならず、結局従来のL2教材の内容にプラスアルファで多文化的教育をも狙った要素を含んだ教材が望ましいということになる。このような指摘をおこなうのは容易であるが、多文化的教育そのもののあり方が移民向け語学教育をおこなう教師にとっていまだに議論的になる問題である現在、移民向けの理想的な語学教育用テキストを実際に作成するのはけっして簡単な仕事ではない。

5. まとめにかえて

本稿ではスペインにおいて近年急増した移民のためにおこなわれている言語教育の実情を概観してきた。移民たちが置かれている現況を踏まえつつ、スペイン政府や教育機関の方針や現場の教師たちがおこなってきた試みの数々を検討してみると、移民たちをスペイン社会の中に受け入れるための態勢が最近の10年ぐらいの間に急ピッチで整えられてきたことがわかる。元々スペインはスペイン語力が不足している外国人の受け入れ体制を十分に持っている国であるので、移民が短期間のうちに急増したからといって手のつけられない大混乱が起こっているわけではない。しかし、その大半が労働者やその家族としてスペインにやって来た移民たちの中に

は、以前は必ずしもスペインやスペイン語とは縁がなかった人々やスペイン人の子弟と共に机を並べうる中南米出身の子供がいる。そんな彼らは、母国でスペイン語を勉強した後にスペインに来て外国人向けのスペイン語コースに在籍するために高いお金を払うことを厭わない人々とは社会的境遇が明らかに異なっている。よって、スペイン語教育界はそれまでに確立してきた外国人向け語学教育の見直しを早急に迫られ、現在に至っていると言える。このあたりの事情は、かつて1980年代後半から日系人を中心とした出稼ぎ労働者が大勢来日し、日本語学習ブームが起こったことで日本語教師の養成や教授法の確立が急務となった1990年以降の日本語教育事情に近似するところをいくつも見い出すことができる。外国語の学習者はその言語を使う必要に迫られたほうが上達が早いものであるが、学習者を受け入れる側にも同様のことが言える。つまり、教育システムの整備が急がれる時に確立された教授法やその他の数多くの創意工夫には参考になるものが多いのである。日本でスペイン語を教える立場にある教師の一人として、近年のスペインにおけるスペイン語L2教育の成果は今後大いに参考にすべきであると考えている。

もちろん、参考になる点ばかりではない。日本ではスペイン語教育はほぼ成人を対象としているので、スペインの移民対象の語学教育の中ではもっぱら成人向けL2教育を参考にすることになるが、移民教育に携わるスペインの現職教師からの体験的報告を読むと、成人向けの語学教育はスペインにおいてもまだまだ解決すべき問題を抱えているようであり、未成年向けの授業ほどの成果を上げるのが困難であるような印象を受けた。その上、日本のスペイン語学習者はスペイン在住の移民ほど切実な語学能力獲得の必要性を持っていないため、この点については日本でスペイン語を教える者として学習者のモチベーションを上げる方法を独自に考えていかねばならないところである。

スペインでは Instituto Cervantes が移民に対する教育にも力を注ぎつつある。Instituto Cervantes がスペインの国外・国内両方のスペイン語教育に深い関心を持ち、積極的に活動をおこなっている様子は web ページ等からも知ることができる。このように自国の言語教育に関する情報を国内外両方に発信するような、Instituto Cervantes に相当する組織が日本には見当たらないのが残念である。

スペインの移民問題を言語という側面から考察すると、一つの国家であ

りながらその内部には文化的言語的な多様性があることを国民自らが意識し、しかも今まで他民族流入に慣れてきたはずのスペイン人が、移民の持つ多様性を十分に咀嚼しきれず、彼らを自分たちと同じく多様性を持つ人々として受け入れるまで時間がかかり、どちらかと言えばマイナスのイメージに片寄ったプロトタイプ像に彼らを押し込めて、ことばでそれを表現しがちであることがわかる。しかし、時の経過と共に、また、語学教育を通して移民たちをスペイン社会に融合させるという関係者の努力により、移民たちは少しずつではあるが問題のある存在ではなくなりつつある兆しがうかがえる。

他方で、彼らへの語学教育はまだ試行錯誤を繰り返している面もあるようで、特に現場の教師の報告を読むと、移民に対する偏見が国の方針や教材などに依然として残っていることが指摘されている。また、多文化教育の重要性について多くの関係者が意識しながらその理想的なあり方をいまだに模索中であることがわかる。筆者自身、国籍も母語も異なる外国人留学生に日本語を教えた経験を持っているため、例えば、Delia Castro y Pueyo (2003) が論じている移民に言語を教える教師や生徒のあるべき姿について共感するところが多い。とりわけ教師は教室に於ける多文化の扱いに細心の注意を払いながら授業を進めていくべきであり、これは誰しも頭で理解してはいるもののその実践は思いの外難しいものである。今回のスペインの移民向け語学教育に関する考察を機会に、今後は多文化教育それ自体についてもさらに理解を深めていきたい。

Nota

- 1) Cea D'Ancona (2004: 311) Tabla A.7. Nacionalidad de las diez principales comunidades de extranjeros residentes en España を参照。移民の国籍についてはその他マスコミでもしばしば報道されるが、数字の上で目立つのはモロッコ、エクアドルであり、その他ヨーロッパ国内ではイギリス、ドイツ、フランス、ポルトガルのような近隣諸国の他、ルーマニアからの移民も目立ってきている。中南米ではコロンビアやペルー、アルゼンチン出身者が多く、その他の地域では特定の職業に就くことで目立っている中国人（1ユーロショップや飲食店店員）やイスラム圏の移民（ケバブ屋、自然食レストランなどエスニックフード業に関係）が目立つ。現地在住の複数の友人知人談によると、彼らは同国人の間で資金を回して店舗を手に入れ、堅実に地域に根付いている

とのことである。

- 2) Cea D'Ancona (2004: 311) Tabla A.25. Características que definen los distintos tipos de actitudes ante la inmigración を参照。
- 3) Cea D'Ancona (2004: 315) Tabla A.8. Problemas principales en la actualidad en España を参照。最高3つまで複数回答可とされている。
- 4) この年の順位は1. 失業 2. ETA のテロ問題 3. 都会の治安悪化 4. 住宅問題 5. 移民問題であった。
- 5) EL PAIS, 24 de agosto de 2005 を参照。
- 6) Montoya (2005: 289) を参照。
- 7) Montoya (2005: 290) を参照。
- 8) Díaz (2002: 85) を参照。
- 9) Díaz (2002: 85) の引用文は以下の通り。筆者は綴りの間違いで当該の人物(母語は wolof 語)の発音の不正確さを表している。

Yo con unas personas habla *inglés*. Con otra habla *uskera* o *castiano*. Con los marrocos habla *árabe*. Sabe *francés* y sabe *wolof*, y puede hablar *mandinga*. Yo sabe otras lenguas de me país: *sarakolé*, otras ... Antes yo vivo en Lendaran, allí prende *uskera*: «¡Oso herri polita da!» Es un pueblo muy bonito. ¿Tú sabes?, yo siempre gusta conocer más ... y pregunta parabras para tender más, mí gusta mucha parablar. «Bismillah' rahman' rahim». ¿Tú sabes qué dice? Dice: «en el nombre de Dios, Dios da feliz», así decimos nosotros. Yo habla una lengua, otra lengua ... y así puede tender todos.

- 10) LOGSE と LOCE の改革内容については安藤 (2004: 178-180) による。
- 11) 参考 URL アドレス①を参照。
- 12) 参考 URL アドレス②を参照。1993年から2004年までの統計データ。
- 13) 参考 URL アドレス③を参照。
- 14) 参考 URL アドレス④を参照。
- 15) Viana y Orte (2004: 3-4) を参照。
- 16) バルセロナの Escuela Oficial de Idiomas のカタルーニャ語コースの受講経験を持つ筆者の友人によると、その時のクラスで生徒として多数派はカステイリャ語話者のスペイン人とフランス人で、多数派ではなかったが中南米出身者もいたとのことである。
- 17) García Mateos (2003: 113) の報告の例として、中国人は長音の発音や L と R, P と B, T と D の音の区別を苦手にする傾向があることや、インドアリア人は動詞を文の最後に置いて、*hombre sentado está* や *chica guapa es* のような文を生成する可能性があることなどがある。García Mateos (2004) は同(2003)を発展させ、学習者のレベル別、母語別の詳細な考察と共に現場の教師にとって参考になるような具体的な用例やモデルを提供している。

- 18) Hernández García y Villalba Martínez (2004: 82) を参照。
- 19) 著者たちが別に出しているデータを見る限りでは、調査対象となったのは12冊以上あるようだが、採用されている教授法について判断し難いテキストもあったようである。
- 20) Hernández García y Villalba Martínez (2004: 88–89) を参照。引用例は *Español para ti*, p. 22 より。
- 21) Hernández García y Villalba Martínez (2004: 89) を参照。例として指摘される *Mis primeros días*, p. 12 の «Pregunto a papá y mamá ... ¿Cómo se llaman? Papá y mamá se llaman ... ¿De dónde son? / ¿Dónde viven? / ¿De dónde vienen? / ¿Cuántos años tienen?» については現実に何度も子供が親に発する質問ではないため、その応用範囲の乏しさが問題になっていると思われる。
- 22) Hernández García y Villalba Martínez (2004: 90) を参照。

Bibliografía

- 安藤万奈 (2004) 「第3章 生まれ変わったスペイン 教育」『現代スペイン情報ハンドブック』(坂東・戸門・碓編)、三修社、178–186。
- Andrade, Cinthia y Elena Cabezalí García (2004) “Ecuatrianos inmigrantes en la enseñanza secundaria en Madrid” en *Tarbiya* 35, Universidad Autónoma de Madrid, 117–140.
- Calero, M^a Ángeles *et al.* (2002) “La presencia del racismo en el discurso lexicográfico: su repercusión en la enseñanza”, *Textos de Didáctica de la Lengua y de la Literatura* 31, Editorial Giraó, 65–74.
- Cea D’Ancona, M^a Ángeles (2004) *La activación de la xenofobia en España ¿Qué miden las encuestas?*, Centro de Investigaciones Sociológicas, Madrid.
- Delia Castro, M^a y Silvia Pueyo (2003) “El aula, mosaico de culturas” en *Carabela* 54, SGEL, 59–70.
- Díaz, Beatriz (2002) “Uso de las lenguas por los inmigrantes” en *Textos de Didáctica de la Lengua y de la Literatura* 30, Editorial Giraó, 84–98.
- 江澤照美 (2005) 「スペインの社会と言語——今日のカスティーリャ語の姿」『愛知県立大学外国語学部紀要』(言語・文学編) 37, 227–249.
- García Mateos, Crescen (2003) “Experiencias y propuestas para la enseñanza de la L2 a personas inmigradas” en *Carabela* 53, SGEL, 105–131.
- (2004) *Experiencias y propuestas para la enseñanza de L2 a personas inmigradas*, Editorial Edinumen, Madrid.
- García Parejo, Isabel (2000) “Procesos de pidginización en el español hablado por inmigrantes” en *¿Qué español enseñar? Norma y variación lingüísticas en la*

- enseñanza del español a extranjeros*, Actas del XI Congreso Internacional de ASELE (Zaragoza, 13–16 de septiembre de 2000), 349–358.
- Hernández García, Maite y Félix Villalba Martínez (2004) “Los materiales didácticas en la enseñanza del español a inmigrantes” en *Textos de Didáctica de la Lengua y de la Literatura* 36, Editorial Giraó, 81–93.
- 碓順治 (2004) 「第3章 生まれ変わったスペイン 政治」『現代スペイン情報ハンドブック』(坂東・戸門・碓編)、三修社、130–143.
- Lechuga Quijada, Sergio (1996) *Castellanopatías Enfermedades del castellano de fin de siglo (Con un Diccionario de lo que no hay que decir)*, Ediciones Universidad de Navarra, S.A., Pamplona.
- Montoya, Ramiro (2005) “Suplemento Diccionario comentado del español actual en Colombia” en *Diccionario comentado del español actual en Colombia*, Editorial Vision Net, Madrid, 281–354.
- Ribas Bisbal, Montserrat (2003) “Usos lingüísticos y xenofobia: cómo hablamos de los inmigrantes” en *Carabela* 54, SGEL, 29–45.
- Sánchez Lobato, Jesús et al. (eds.) (2003a) *Carabela* 53, SGEL, abril de 2003.
- (2003b) *Carabela* 54, SGEL, septiembre de 2003.
- Viana, Mercé y Pilar Orte (2004) *Amigos Español Lengua Extranjera*, Dylar Ediciones, Castellón.
- Villalba Martínez, Félix y M^a Teresa Hernández García (2003) *Recursos para la enseñanza oral del español a inmigrantes no alfabetizados. Primer y segundo ciclo de ESO*, Comunidad de Madrid, Consejería de Educación, Dirección General de Ordenación Académica, Madrid.

新聞記事

- EL PAIS (24 de agosto de 2005) “Sólo uno de cada cinco niños que se adoptan cada año es español”.

参考 URL アドレス

- ① http://noticias.juridicas.com/base_datos/Admin/lo10-2002.html
BASE DE DATOS DE LEGISLACIÓN Ley Orgánica 10/2002, de 23 de diciembre, de Calidad de la Educación.
- ② <http://www.mec.es/>
Ministerio de Educación y Ciencia (MEC) 特に Educación Intercultural の項参照
- ③ <http://www.mec.es/cide/espanol/publicaciones/boletin/files/bol013ene05.pdf>

MEC 内の統計データ CIDE (boletín de temas educativos 13号, 2005年1月)

④ <http://cvc.cervantes.es/obref/inmigracion/>

La enseñanza de segundas lenguas a inmigrantes (Centro Virtual Cervantes 内コンテンツ)

La educación de E/LE a inmigrantes en España

Terumi EZAWA

España ha sido un país al que han llegado a vivir muchos inmigrantes de diversos países. Muchos de ellos han venido de África, Asia, Europa, los cuales no son nativos del español. Y el resto de Latinoamérica. Entre los españoles hay algunos que no quieren aceptarlos y otros que lo hacen con gusto. Todavía quedan algunos prejuicios discriminatorios sobre los inmigrantes, pero, va a desapareciendo poco a poco el sentimiento malo de los españoles hacia ellos.

El Gobierno se ve obligado a tomar medidas especiales para la educación de E/LE a inmigrantes a través de la LOCE. Los niños y los jóvenes (tanto los nativos como los no nativos) tienen que estudiar en las escuelas primarias y secundarias, por eso muchos de ellos necesitan tomar clases suplementarias. Y los adultos no nativos del español también necesitan aprender español para adquirir el conocimiento perfecto del idioma y vivir mejor. Así que muchos profesores de E/LE tienen clase del idioma a inmigrantes y analizan los errores gramaticales de su alumnado y discuten sobre los diversos temas de la educación de E/LE : edad de los alumnos, su lengua materna, la metodología, los materiales, la interculturalidad, etc.

Hemos averiguado en este pequeño ensayo las actividades del Ministerio de Educación y Ciencia, del Instituto Cervantes, de los profesores de E/LE a inmigrantes y sus publicaciones. Y hemos visto sus resultados y problemas. La interculturalidad es un tema complicado y difícil de tratarse en el aula, pero sería indispensable su entendimiento para la educación a inmigrantes.